教育

どうする？ 性同一性障害の子に接する

受け止め、学校と連携も

心と体の性が一致しない性同一性障害の子どもたちは、「自分はおかしいのではないか」と苦しんでいます。背景にあるのは、根強い差別や偏見。親や教師はどう向き合ったらいいのか考えました。

「自分の声も、背が高いのも嫌い」。そう言って家にひきこもったまま、ほとんど声を出さずに、腰を落として歩く。そんな我が子(18)の姿に、関西在住の女性(48)の胸は痛む。「もっと早く対処できていたなら……」

成績優秀な自慢の「息子」だった。だが中学でいじめを受け、不登校がちになった。

一番仲の良かった友人に「心は女の子だ」とメールで打ち明けたら、「気持ち悪い」と学年全体に広められ、無視が始まった――。こうした経緯は、後になって知った。「なぜまずお母さんに言ってくれなかったの？」と尋ねると、「期待を裏切るようで言い出せなかった」と話した。

「過去にスカートをはきたがる男子もいたけど、なおりましたよ」という中学教諭の言葉にすがり、「とにかく高校には行って」と単位制高校に進ませた。しかし、男子として通うのがつらい、と結局続かなかった。女性が「性同一性障害」という言葉を知ったのはその頃だ。

その後、同じ立場の子どもが集まる交流会に参加し、視野が広がるのを感じた。「我が子を変だとしか思えなかったけど、同じ悩みの人とかかわり、ありのままを受け入れればいいと思えた」

だが、子どもは今も対人恐怖が抜けず、外出するのは病院でホルモン療法を受けるときくらい。女性は「私や学校に知識があれば、あの子を追い詰めないで済んだ」と悔やむ。

「学校に変態が来るのは困るんですけど」「すぐにやめさせてください！」

東海地方に住む女性(39)は3年前、教室で20人の保護者に取り囲まれた。小学3年の長男が、学校の了解を得てスカートで通学を始めて1週間後のことだ。

性同一性障害の診断書を示し、理解を求めた。だが「汚いものを見るような目」にさらされ、女性はうつ病に苦しんだ。保護者に比べ、子どもたちの受け入れはスムーズだったのが救いだった。

翌年着任した校長が、金子みすゞの詩「みんなちがって、みんないい」を引き合いに、「スカートをはく男の子がいてもおかしくないんですよ」と集会でスピーチすると、理解を示す親が次第に増えた。

中学入学を来年に控え、子どもは「女子の制服で通いたい」と話す。

学校にどう掛け合うか、周囲の理解は得られるのか。女性は再び頭を悩ませている。

性同一性障害

体の性と心の性が一致しない状態。数千人に1人の割合で見られるとも言われる。

LGBT

レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー（性同一性障害を含む）の総称。

必要なら専門医に

自分の性別への違和感は、多くは小学校入学前から始まっている。岡山大学病院を受診した1167人への調査によると、性別に違和感を抱いた時期は、小学校入学以前が56・6％と過半数を占めた。

「水着を着たくない」「スカートをはくのが苦痛」――。子どもがSOSを発していても、親は深く考えないまま「男の子のくせに」「女の子なんだから」と頭から否定してしまいがちだ。だが、そうした態度は、子どもに「自分はおかしいんだ」「親に本当のことは言えない」と思い込ませ、孤立させることにつながりかねない。

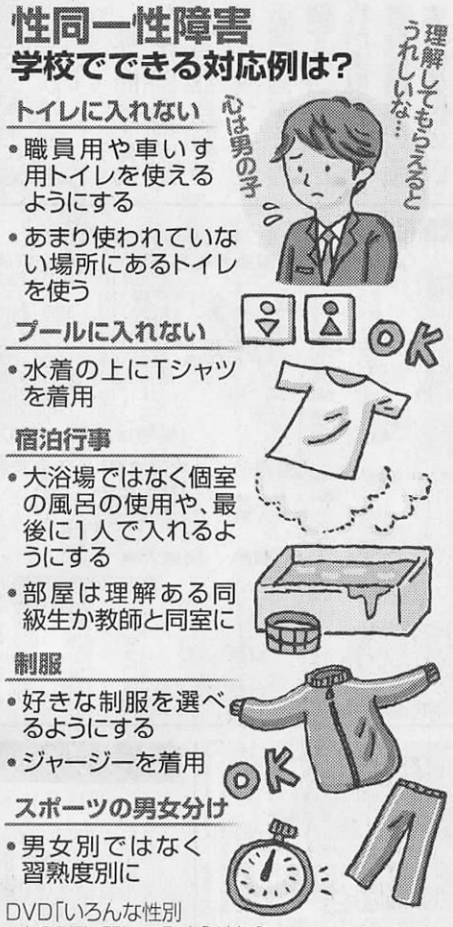
GID（性同一性障害）学会理事長の中塚幹也・岡山大大学院教授の調べでは、当事者約1450人のうち、自殺したいと思ったことがある人は約6割、不登校や自傷・自殺未遂の経験がある人はそれぞれ約3割に上った。親にできることは、まず子どもの言葉に耳を傾け、否定せずに受け止めること。そして、服装や着替えなどについて学校に配慮を求めたり、医療面で対応したりすることが、必要かどうか見定めていくことだ。中塚教授は「必要な対応は一人ひとり違う。全員にカミングアウトしたい子もいれば、誰にも言いたくない子もいる。訴えによく耳を傾け、必要に応じて専門医につないでほしい」と強調する。

中塚教授は、教師の役割に期待する。「信じたくないとの思いから、正面から向き合えない親もいる。教師の役割は大きい」

対応に悩んだ時、相談先はあるのか。

当事者の家族らでつくるNPO法人「LGBTの家族と友人をつなぐ会」（http://lgbt-family.or.jp）は、東京や神戸、福岡で定期的にミーティングを開き、相談にも応じている。医療面では、カウンセリングやホルモン治療などを総合的に行うジェンダー外来が、埼玉医科大や岡山大学病院など全国に10カ所ほどある。（机美鈴）

性同一性障害 学校でできる対応例は？



トイレに入れない
- 職員用や車いす用トイレを使えるようにする
- あまり使われていない場所にあるトイレを使う

プールに入れない
- 水着の上にTシャツを着用

宿泊行事
- 大浴場ではなく個室の風呂の使用や、最後に1人で入れるようにする
- 部屋は理解ある同級生か教師と同室に

制服
- 好きな制服を選べるようにする
- ジャージーを着用

スポーツの男女分け
- 男女別ではなく習熟度別に

DVD「いろんな性別～LGBTに聞いてみよう！」から　グラフィック・下村 佳絵

当事者の視点でDVDに対応策

「ホモ」「おかま」といった差別的な言葉に触れる前に、LGBTへの理解を深めてほしい――。関西を中心に性教育の出張授業をする当事者らのグループ「新設Cチーム企画」（大阪市）は昨年、小学生向けのDVD「いろんな性別～LGBTに聞いてみよう！」を完成させた。

当事者6人が小学生らを前に、性の多様性や自身の生きづらさについて語る姿を収めた。学校でどんな配慮が求められるかも盛り込んだ＝図。